

平成二十五年二月一日発行 第二十三巻第二号 通巻第二六〇号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成25年2月号

岡井省二創刊



秋天に祈る

高橋将夫

けらつつく音に銜の追ひつけず
切り口をなでて竹伐り終はりたる
前を行く人も花野へ行くところ
底紅の紅は弁慶好みなり

鬼の子の風に揺るるは眠るため

秋桜全会一致のごとく咲く

キリギリス獅子心中で鳴くことも

秋冷や鬼も寝顔は子の寝顔

牛膝くつつけ異界より戻る

女は火男は水よ秋遍路

創刊二十一年大会

秋天に祈り大地を拝むなり

槐安集

水野恒彦

人去りて鶏頭は朱を尽しけり
印集「ミルハの塵」を祝ふ
爽涼や青の澄みたる海の色
ちちははに会ひし銀河の闇匂ふ
遙かなる声に応へて蚯蚓鳴く
べたべたと夕日の当る貴船菊

延広禎一

花板の蘊蓄さても蕪蒸
花板「腕の立つ板前」
唐辛子魔女の空飛ぶ辛さから
式神の名は蜜虫よ冬牡丹
日々好日鯛味噌舐めて後生楽たい
ごしよらく
寒造赤穂の塩を当テにして



加藤みき

あかときの森の騒めき神還る
猪撃の帽子に小さき羽根飾り
柚子のいろ着こなしたしや柚子を買ふ
先導の大綿につき行きにけり
大皺も小皺もみんなお正月

石脇みはる

あれもこれも生きてる証大枯野
囲炉裏辺の男考へる葦である
とぐる巻く蛇のくずれて穴に入る
冬うらら人集ひみて何かある
冬の虹向うの街は知らざりし

中島陽華

エデンの園無花果低く実りけり
さくら蓼吾妻の朶手にしたり
手と足が囃子に乗りぬ神無月
抱き籠に稚をり朝の花野かな
クリスタルに触るる匙音秋深し

栗栖恵通子

煮凝りや暁雲溶けるひとところ
「佛」の字に写経はじまる北風
初霜や前掛け紐の花結び
寒林の影のかんかん踊りかな
極月のときに肋間きしみをり

竹内悦子

蕎麦食ふやねずみ大根のしぼり汁
刀豆の実は桃色よ空也の忌
柁の花と手紙と自転車と
せはしいと言ひ霜月の終ひ風呂
髭伸びて一つ歳とる葉喰

大島翠木

夜さこいは夜さり来よてふ新酒酌む
退屈な林檎の体擦りけり
初冬といふ唇の乾きかな
十一月の山に老人笑ひ出す
不老不死の水を持ち来るサンタかな

雨村敏子

道化師の目の十字架や水澄めり
残菊を焚いてをりける香りかな
グラシン紙に透けし背文字や鳥渡る
磐座に紅葉の影とくさびらと
終ゆることいくつ数へし蓮は実に

近藤喜子

いつの日か我を越す旅芭蕉の忌
干し蛸の威張つてをりぬ神の留守
水すべて沈んでをりぬ枯蓮
返り花散るや消えゆく何かあり
のぼせたる鯉の浮きくる小六月

本多俊子

柿すずなりに満たされてゐる不安
海霧の径何も見えざる大いさよ
日本刀反り秋天を光らしむ
しんめうにくぐりぬけたる洞氷柱
寒夕焼狸々の面炎えあがり

谷村幸子

鯉はねてあたり動きし秋の昼
秋深し和池の千年大桂
御霊屋を拝す大空紅葉晴
清流を染めつつゆける紅葉かな
歪みたる軸をただして葛湯のむ

瀬川公馨

熊を撃つ女主人でありしなり
胃カメラに残りてゐたる秋茄子
丁か半かわらわらとをる冬毛蟲
奈翁だとして摘まずにをれぬ草の花
十一月伸るか反るかの大勝負

久保東海司

頂上の視界に余る花すすき
募る冷え祖父母の寝嵩に滑り入り
落葉よし踏んでその嵩ためしをり
十字架澄む磴を異人と連れ登る
くらがりの麴室くらがりの麴干す

西村純太

银杏散る詩心ひとつを拾ひける
京にゐてあめつち匂ふ時雨かな
夕陽に溶けて父母なき柿紅葉
竿頭の百尺さきの冬の虹
旅にゐて幾夜目覚めの虎落笛

中野京子

一斉の末広がりの鴨の水尾
日の中に日がな一日仏手柑
秋麗のまぶし過ぎなる空虚かな
捨石の裾は地の中秋気満つ
爽籟の通奏低音夕の鐘

柳川 晋

丸丸と十一月の媼かな
冬帝はまなざし真直なる處をとめかな
亥の子石搗きて固めて国を生み
天狼の愛かなしき波動揺るがざる
気付かざる北の窓あり今塞ぐ

岩下 芳子

仏手柑のぶらさがりたるこの世かな
ぽんぽんと八手の花を上げにけり
腕まくりして覗き込む海鼠かな
御所柿のどれも王者の面構へ
湖の風を友とす冬桜



槐市集

犬塚芳子

蔦紅葉大樹を抱きて何思ふ
落葉散る幹にたましい残しおく
十三夜己がこころのありどころ
こころにも冬の足音迫りくる
己が手をじつと見つめて冬ぬくし

犬塚李里子

今のわれ枯野漂ふひとりかな
過客とも冬青空を雲の行く
冴え返る嫦娥の空に浮かびをり
湯豆腐吹く晩年の最中なり
枯れてゆくものにも影のありにけり

井上静子

ゆく秋やエスカレーター動き出す
越し方は大波小波枇杷の花
神迎稚の人生はじまりぬ
箸紙に稚の名まえの書いてあり
亡き夫の齡越えたり茸飯

岩月優美子

大日や枯ることなき槐の芯
漆黒の闇に浮き立つ石路の花
みちのくの民話に触れし神無月
曲り家の馬の顔出す小春かな
神留守の大杉の腰据りたる



槐集

高橋将夫選

大原女の露はこび来る童歌 枚方 熊川暁子

米十俵どすんと釣瓶落しかな

気球浮く徐徐に花野を置き去りに

ガラス窓みがき景色を寒くする

ひやひやとFAXは紙喰ひをはる

初霜の光るベンチに坐りける 摂津 中田禎子

耳障りの良き言の葉や枯蓮

金色の夕枯園や赤子泣く

銀杏散りみんな身軽になりにけり

不開の間の透明な鍵冬薔薇

初冠雪富士に青空ほしいまま 枚方 谷岡尚美

すつぽりと伴侶を隠す芒原

ノーベル賞の光あまねし露の世に

一目ごと恋を編み込むスエーター

夜道来てちちる聞き留む共白髪

ときどきは薄目あけたり眠る山 岡崎 岩月優美子

枯蓮の幾何学模様夕日いま

北閉ぢて心に日差し取り入れむ

クリムトの彩さながらに紅葉散る

冬の日の射して輝くアール・デコ

京御所の夜を渡るや鎌鼬 京都 竹中一花

青不動の堂をぐるりと冬紅葉

縄飛びの輪を飛び山を近うする

梟と遊びし森に太き槐 記近藤将夫俳句集上巻

萩枯るる佛の微笑千百年

大津絵の鬼の愛敬小六月 枚方 近藤紀子

枯色の濃き畔道の匂ひかな

翁いふ柿なり年は雪多し

崑崙てふつば押してをる紅葉冷え

月光をペルシアの杯にあふれしむ

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

大原女の露はこび来る 童歌 熊川 暁子

大原女が大原から頭に花や柴などをせて京の町へ売りに来た。それが露に濡れていたのだろうが、「露はこび来る」の表現で、露が鮮明に浮かび上がった。童歌がそんな情景をやわらかく包んでいる。

〈ガラス窓みがき景色を寒くする〉の句は、きれいに磨かれたガラスの様子が「景色を寒くする」の表現からリアルに伝わってくる。

〈気球浮々徐徐に花野を置き去りに〉の「花野を置き去りに」するという着眼がいかにも作者らしく、気球がゆっくり上昇していく様子を巧みに捉えている。また〈ひやひやとFAXは紙喰ひをはる〉の「ひやひや」「紙喰ひをはる」は紙がFAXに吸い込まれていく様子を巧みに表現している。

〈米十俵とすとんと釣瓶落しかな〉の句だが、日暮れの早さをこれほどの迫力で詠まれては、返す言葉もない。

金色の夕 枯園や 赤子泣く 中田 禎子

夕日で金色に染まった枯野の景から「赤子泣く」へ転調するのがこの句の眼目。枯野で赤子が泣いている景もこんな風に切り取られると童話の世界を見る気がしてくる。

〈不開の間の透明な鍵冬薔薇〉は不思議な句。開かずの間でも鍵さえあれば開くのだが、その鍵が透明なら絶対に開けられない。久薔薇とはそういう存在なのだろうか。

〈初霜の光るベンチに坐りける〉は新鮮。美しければ、濡れ

ることなど気にならない。

〈耳障りの良き言の葉や枯蓮〉と〈銀杏散りみんな身軽になりにけり〉の句は枯蓮も銀杏の冬木もかるやかに捉えられていて、好感がもてる。

ノーベル賞の光あまねし露の世に 谷岡 尚美
確かに露のようにほかない世ではあるが、ノーベル賞の対象となった業績は現実の世をしかと照らしているのだ。

〈一目ごと恋を編み込むセーター〉は〈すっぽりと伴侶を隠す芒原〉からみて、若かりし頃へのノスタルジーなのだろう……と言ったら反論されそう。いずれにせよ「一目ごと恋を編み込む」の表現は若々しい。

ときどきは薄目あけたり眠る山 岩月優美子

眠ったようにひっそりとした冬の山がときどき薄目を開けて世間を見ているというのが、いかにもユーモラス。俳諧。

縄飛びの輪を飛び山を近うする 竹中 一花

縄飛びの輪を見ていて、遠くの山が近くに見えたという。まるで縄飛びの輪の中に山まで飛び込んできそうに愉快。

月光をペルシアの杯にあふれしむ 近藤 紀子

月光を杯に受けるのである。それも、あふれるほどみなみみと。しかもペルシアの杯である。エキゾチックな景。

(以下略)